

見慣れた駅の姿を守り 線路のように続くつながりを

「踏切の音は生活音」と話す
安曇追分駅の見守り隊

竹内 悦子 さん



安曇追分駅を愛する会の事務局として、会の発足から活動を支えている竹内さんに話を聞きました。

つながりが深まっていく駅

新聞で駅の無人化のことを知り、令和2年2月から駅員の在中を願って署名活動などを行いました。このとき中心となって動いたメンバーで翌年3月に「安曇追分駅を愛する会」が発足しました。発足後初めての活動は、駅舎南側の花壇整備。重機で土を盛り緑石を並べ、会員が持ち寄った花の苗や球根を植えました。パンジーやマリゴ、イルドがきれいに並んでいるような花壇ではありませんが、多種多様な花が植えられており、春先にはフクジュソウ、夏にはアヤメなど季節によって姿が変わります。草取りなどの手入れも定期的に行っており、時折JRの皆さんがお茶を差し入れてくれたり、利用者から感謝されることがあってうれしく思います。

本年7月には駅開業110周年記念として駅舎で作品展を行いました。また、地元商工会や育成会の皆さんに呼び掛け、協力し合って納涼祭の開催も。当

日は短時間でしたが、この小さな駅を拠点に子どもたちの笑い声が響き、世代を超えたにぎわいが生まれたことに胸が熱くなりました。多くの人や地域のつながりが深まってきていると感じ、活動にやりがいを感じた瞬間です。

安曇追分駅発着の旅

「駅を愛する会をうたっているからには鉄道を使おう」ということで、会では年1回日帰り鉄道の旅を行っています。旅のルールは、安曇追分駅を出発し安曇追分駅に帰ってくる。初回は大糸線を北上し、糸魚川に行きました。

安曇追分駅を出発した電車は、タタリタンと心地良いリズムで信濃大町、南小谷へと向います。車内では、のどかな田園風景と雄大な北アルプスを横目に、気の知れた仲間がビールとおつまみで会話を弾ませます。南小谷駅での乗り継ぎに1時間半ほどあったので、1つ前の千国駅で下車し、塩の道を歩いて南小谷駅へ行くメンバーも。南小谷駅を出発し、1両編成のデイズルカーで1時間ほど進み糸魚川駅に到着すると、昼食にみんなでお寿司を楽しみました。帰路では、南小谷駅へ向かう途中で姫川温泉に寄って汗を流し、再び電車を乗り継ぎながら安曇追分駅へ戻ってきました。その翌年



1951年北穂高生まれ。「穂高絵本とお話の会」会員として小学校やこども園、図書館等でお話会や読み聞かせのボランティアを行っている。趣味は寺巡りと時刻表を見ながら空想の旅をすること。

MEMO
○塩の道
千国街道のこと。日本海の塩や海産物が運ばれたことからそう呼ばれている。上杉謙信が武田信玄に塩を送った「敵に塩を送る」の舞台。
○信州ワンデーパー
JR東日本が販売する、信州エリア内の普通列車が1日間乗り降り自由になるきっぷ。

は青春18きっぷを使い小海線へ、さらに次の年には信州ワンデーパーを使って飯山へと、毎年旅を続けています。通学等で利用した身近な駅が当時と変わらない姿でいること。それは、人によっては懐かしさを感じ、ふるさとを象徴する景色となると思っています。今後も、地域のつながりを大切に、この駅を愛し、姿を守り続けられるよう活動を続けていきたいです。

夜 空に咲いた 大輪に込めた思い

8月14日 第18回安曇野花火



安曇野の夜空を彩る花火大会が御宝田遊水池で開かれました。市制施行20周年を記念した本年のテーマは、旧5町村の絆を深めたいと願った第1回と同じ「安曇野は、ひとつ」。恒例のメッセージ花火や音楽花火のほか、旧5町村をイメージしたスターマインなど色とりどりの花火が打ち上げられました。訪れた大勢の人は次々と夜空に咲く大輪の花に歓声を上げたり拍手を送ったりしていました。

初めて訪れた仲山雄貴さん(34・三郷温)は「思いが詰まったメッセージ花火に感動した。子どもたちと落ち着いて楽しめた」と話してくれました。

急 流もへっちゃら 爽快水しぶき

8月15日 明科公民館夏休みカヌー教室



カヌーの体験教室が龍門洲公園で開かれ、小学生から大人までの21人が参加しました。最初に基本の動作を学び、じゃぶじゃぶ池でカヌーやサップを体験。バランスの取り方に苦戦していた参加者も「大きく柔らかくこいでみて」と講師からアドバイスを受けると、すぐにコツをつかんでいました。最後に前川のカヌーコースを下り、ウオータースポーツの魅力を全身で感じていました。大学の夏休みで帰省し参加した池田佳穂さん(20・東京都)は「カヌーは初めての体験。パドルをこぐ力のかけ具合が難しかったが、最後は川下りを楽しめて満足」と笑顔を見せてくれました。

か がり火で彩る夏の夜 新作能「犀龍小太郎」を13年ぶりに上演

8月23日 第34回信州安曇野薪能

西の空が茜色に染まる頃、龍門洲公園で信州安曇野薪能が開かれました。本年は市制施行20周年を記念し、安曇野の民話を題材とした新作能「犀龍小太郎」が平成24年以来13年ぶりに上演されました。来場した約580人は、笛や鼓の音と舞が織りなす伝統的で幻想的な雰囲気の中で能舞台に見入っていました。

鑑賞は今回で8回目という沖さゆりさん(68・松本市)は「犀龍小太郎はとても感動した。安曇野のことをよく理解して書かれた台本で、会場が一体となって盛り上がり本当によかった」と感動を語ってくれました。

